

2025大阪・関西万博奮闘記

1. 序

<サイバー空間での予約手続き>

今年の5月にインターネットで入場チケット「夏パス」を購入し、会場近くのホテルも予約しました。私が最も訪れたいパビリオンは、今回の万博のテーマ“シグネチャパビリオン”の福岡伸一プロデュース「いのちの動的平衡館」や石黒浩「いのちの未来」館などでした。しかし、インターネットで予約チケットを手配した7月時点は既に手遅れ！それでも3日前に行われる抽選会や当日予約枠チケットの獲得にわずかな望みを託して万博会場へ向かいました。しかし入場チケットとパビリオン予約チケットの入手の無理難題に挑戦しましたが叶わず、見たいパビリオンには入れませんでした。空いているパビリオンや大屋根リング上から万博会場の全貌や夕刻の花火を鑑賞し、訪れたことのある思い出の国のフードをテイクアウトして「静けさの森」周辺で食べ、世界最古のドイツビールを飲みながら海外旅行の気分になりました。バリアフリーの会場内を2万5千歩も歩いた日もあり、最後の日は2時間待ちを厭わずアメリカ合衆国館などに入りました。多くの“学び”もあった5日間にわたる奮闘の“万博の旅”を紹介します。



入場チケット(QRコード取得) 大屋根リング上から望む会場風景

<万博会場のエキスポ新聞に載る?!>

『「いのち輝く未来社会のデザイン」をテーマにした今回の「万博」には、人・モノを呼び寄せる求心力と発信力があります。万博は、世界中から多くの人・モノが集まり、地球規模の課題に取り組むために、各国の英知が結集する場です。1970年に日本で、そしてアジアで初めて開催された「大阪万博(EXPO'70)」は、日本の高度経済成長を象徴する一大イベントとなりました。そして2025年、「大阪・関西万博」が現在開催されています。2005年の「愛・地球博」以来、20年ぶりに日本で開かれる国際博覧会です。

「万博」では新しい技術や商品が生まれ、私たちの生活をより便利にする「きっかけ」が数多く生まれます。大阪・関西万博が目指すのは持続可能な開発目標（SDGs）の達成への貢献、そして日本の国家戦略「Society5.0」の実現です。最先端技術と世界の知恵が結集し、新たなアイデアを創造・発信。（中略）未来を創る舞台、「万博」。最先端のテクノロジーに触れ、新しい発見に出会い、世界中の人々をつなげる特別な体験が、きっとあなたを待っています。さあ、みんなでワクワクしながら、思いっきり楽しみましょう！』

以上は、万博会場で編集・発刊されていたエキスポ新聞の記事（一部省略、下線は筆者）です。白黒のエキスポ新聞は無償でしたがカラー写真は有料（1,500円）で自分のスマホにダウンロードできる仕組みになっていました。下記の写真は、この新聞に「大阪・関西万博を楽しむお客様」（実は私たち二人）として掲載されたものです。

マスコットの「ミyakミyak」は“脈々”を意味し、延々と続くいのちの営みを象徴した万博の公式キャラクターです。赤い「細胞」と青い「水」がひとつになったことで生まれた不思議な生命体であり、分かれたり、増えたりする変幻自在な生き物です。



会場発刊「エキスポ新聞」 「ミyakミyak」と「大屋根リング」と共に

2. 2025大阪・関西万博 <いのち輝く未来社会のデザイン>

「公式ガイドブック」では、『大阪・関西万博のテーマ「命輝く未来社会のデザイン」が目指すのは、人間一人ひとりが自らの幸せや生き方を見つめ直し、それぞれの可能性を最大限発揮できる持続可能な社会を世界と共に作ること。（中略）いのちに真正面から取り組む史上初の万博です。』と紹介しています。会場では、そのとおりの世界を実感しました。

＜日本の国家戦略「Society5.0」の実現＞

西ゲートエリアの「未来の社会」パビリオンには、人類の進化と発展の推移を象徴した展示がありました。「Society1.0」の狩猟社会から、農耕・工業・情報社会と発展してきました。現代社会は既に「Society5.0」、即ち『仮想空間と現実空間を高度に融合させたシステムにより経済発展と社会的課題の解決を両立する人間中心の社会』に入っており、これから益々深化していくだろうと実感させられました。我々シニア世代もこの“流れ”に乗ればより豊かな日々が享受できるのではないかと思います。

＜最先端のテクノロジーに触れた新たな発見＞

PASONA NATUREVERSE(パソナ ネイチャーバース)パビリオンのテーマは、“ありがとうが響き合う世界” 「いのちの歴史」「からだ」「こころ・きずな」の3ゾーンで構成され、「からだゾーン」では“いのちの象徴”であるiPS 心筋シートの技術を活用した「iPS 心臓」などの未来の最新テクノロジー医療に大きな期待を抱きました。

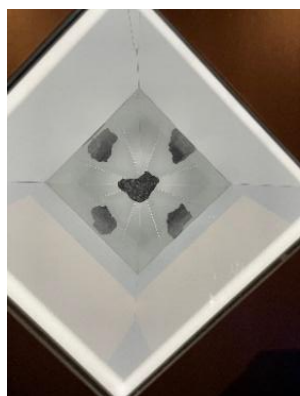
鉄腕アトムがナビゲータを務め、ブラック・ジャックが未来の医療のあり方などを紹介していました。



動く iPS 心臓（中心の円）

＜ワクワクしながら思いっきり楽しむ＞

アメリカ合衆国館はいつも長蛇の列でした。どんな展示が見られるだろうかというワクワク感を抱いて2時間待ちました。そこでは、テクノロジー、宇宙開発など米国のリーダーシップの紹介があり、月から持ち帰った石の展示もありました。



フランス館も長蛇の列でしたが、来館者を連続的に館内に誘導していたのであまり待たずに入れました。展示コーナーの傍に QR コードがあり、スマホで読み込むと詳細な内容が誰にも分かるようになっていました。

月の石の展示（実物）

また、日本と関係がありながら現状が知られていない国々、例えば、アラブ首長国連邦、トルクメニスタンなどや見たことのない国旗のアフリカの小国などの展示コーナーにも改めて親近感を覚えました。

<万博会場で痛感したこと（教訓）>

各パビリオンでは現代の最先端テクノロジーや近未来の社会“「Society5.0」”を垣間見た一方、万博会場では既に多くの若者がスマホの「EXPO2025 Visitors」や「VIRTUAL EXPO 空飛ぶ夢洲」の公式万博アプリを使いこなしながら自由自在に歩き回っている姿に圧倒されました。これからの日常生活にはスマホの活用は必須であり、近未来の情報格差社会はスマホの知識と依存の程度によって生活の質の差が益々拡大するでしょう。

3. 過去の万博の思い出

<大阪万博（EXPO'70）>

1970年、「人類の進歩と調和」を掲げた日本・アジア初の日本万国博覧会。携帯電話、モノレール、電気自転車、電気自動車などが展示された116のパビリオンを巡りました。三つの顔を象徴する巨大な「太陽の塔」の内部にも入って見た不思議な世界を思い出しました。



大屋根リング内で記念写真

社会人になったばかりの私は、近未来の社会を想像しながら会場を走り回り、勾配がある場所で転倒し右手の指を骨折して手術。昼食時に飲んだビールが原因かも?!これが「きっかけ」で今の家庭があるのです。二人が大屋根リングに入ってすぐ、ボランティアサービス隊の歓迎と祝福を受け、結婚記念日の写真を撮ってもらいました。

<つくば科学万博（EXPO'85）>

つくば科学万博は、科学技術庁がエネルギー問題を中心とした科学技術博覧会構想を立案し、「国際博覧会に関する条約」に基づく特別博覧会として登録され、1985年3月～9月に開催されました。「人間・居住・環境と科学技術」がテーマであり、日本を含む48か国と37の国際機関が参加しました。国内パビリオンの展示のうち産業用ロボット、コマ芸ロボット、カーナビ、携帯同時通訳器、巨大立体映像などが記憶に残っています。現在、そのすべてが実用化されています。当時小学生だった二人の息子たちは多くのパビリオンをわくわくして見て回っていた姿が脳裏に蘇ってきました。

＜２００５愛・地球博＞

２００５年、既存の森林や池をそのまま利用して、建設地が環境に与える影響を最小限に抑えた設計の「愛・地球博」が愛知県の長久手会場で開催されました。燃料電池・太陽光発電・蓄電池などを組み合わせた複合発電システム、緑化壁、磁気浮上式リニアモーターカーなどの展示がありました。この会場では、両親の車椅子を押してどのパビリオンにも待つことなく入場できました。両親も嬉しそうであり、ささやかな親孝行ができました。

４．結び

今回の“万博の旅”の前半３日間は妻と二人の旅。期待のパビリオンの入館が叶わず、再挑戦するかどうかかなり迷いましたが、一人で再挑戦を決定。その２日間でやっといくつかのパビリオンを観ることができました。帰宅後の今、事前の準備不足を反省し、「公式ガイドブック」、「バーチャル万博」、

「VIRTUAL EXPO 空飛ぶ夢洲」などを使って復習しています。会場外のバーチャルなサイバー空間で自分のアバターを作ってパビリオンやイベント会場を巡ることができます。

小学生の孫は日頃からこのサイバー空間に慣れ親しんでおり、好きな時に離れている友だちと一緒にインターネットを介して遊んでいる姿を思い出します。このように「Society5.0」は既に現代社会に浸透しており、私たちシニア世代も、孫がいれば、孫から学んで余生を謳歌しては如何でしょうか。

今回の“万博の旅”の教訓は、①予習してから実体験し、②諦めずに挑戦し、③世代を超えて学ぶことの大切さ でした。